

ラロ貝塚群調査 30 年の研究成果

小川英文

注意：本稿の図版は割付用で、実際は別に作成・添付

はじめに

ラロ貝塚群が青柳とカバニリアによって発見されて以来、すでに 30 年以上が経過した(青柳 1977; Cabanilla 1972)。現在では毎年の調査によって、土器群の型式編年と絶対年代、編年に基づいた貝塚群の時代的変遷過程、そして低地貝塚群と山地の洞穴・開地遺跡との時代的関係が明らかとなってきている。筆者の調査目的は、先史狩猟採集社会と農耕社会の交流実態を考古学的に検証することであるが、その議論に至るまでに、さまざまな考古学的手続きが必要となる。そのため調査項目は多岐にわたっている。それらを概観すると、1)土器編年と遺跡分布の変遷(青柳 1983; 青柳・田中 1985; 青柳他 1988-93; De la Torre 1995-2002; Garong 1996-2006; 小川 1998, 1999b, 2000a, 2002a, b, c, 2003a, 2004a, b, 2005a; 小川・ロンキリオ 2006; Ogawa and Aguilera 1992; 田中 1993, 1996, 1997a, 1998a, b, 2002a, b, 2003, 2004a, 2005)、2)貝塚の形成過程(Garong and Toizumi 2000; 小川 1997, 2006)、3)貝塚形成と河川の古環境(田中 1997b, 2002c, 2004b)、4)動植物遺体の研究(Bautista 1996-7; Garong 2001, 2006; 樋泉 1999)、5)年代測定と古食餌研究(三原他 2001-2005)、6)先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係(小川 1996, 1999a, 2000b, 2003b, 2005; 田中 2000)、7)先史文化圏との交流(青柳 2001; 青柳・小川・田中 1996; Aoyagi, Ogawa and Tanaka 1998)、8)貿易陶磁器研究(青柳 1999a, b)等に大略、分類できる。

本稿では、これらラロ貝塚群の調査・研究成果のうち、土器編年と遺跡分布の変遷について、その概要をまとめ、その成果を問いたい。具体的にはまず、ラロ貝塚群土器編年のなかで各時代を代表する 4 つの土器群の内容と相対的位置づけを概観する。つぎに、それぞれの土器群が出土する遺跡分布の時代的変遷を、ラロ貝塚群中に位置づける。最後に、ラロ貝塚群における遺跡分布の時代的变化を 6 期に分け、各期の特徴を提示する。

1. ラロ貝塚群と出土遺物の概要

フィリピン北東部のカガヤン州ラロ町域を中心として、カガヤン川沿い 50km におよぶ河岸段丘には、4000 年以上前から今日までに形成された巨大な貝塚群が 20 ヶ所以上分布している(図 1)。これらの貝塚の上には現在でも貝を採集して生計を営む人びとが生活しており、貝塚は形成過程にある(小川 1997, 2006)。現在でも貝採集が続けられている村の貝塚の規模は巨大で、最大のもは長さ 500m~2km、幅 100m、深さ 2m におよぶ。また河岸から沖積平野を経た丘陵地域には、洞穴や開地遺跡が点在し、貝塚で検出される遺物が出土する。丘陵地域には現在でも、狩猟採集民アグタが低地社会との交流をもちながら生活している。調査域はラロ町域を中心として、カガヤン川河口から上流へ 50km 遡った沖積地と川の東側に位置する丘陵地域の 10km 内陸にまでおよぶ。貝塚のうち主要なものは河岸段丘上に形成されているが、河岸から約 1km の範囲に広がる低湿地や、10km 離れた丘陵地域の洞穴内でも、河岸の貝塚と同種の貝で形成された貝層が確認されている。貝塚は淡水産二枚貝 3 種と巻貝 5 種で形成されているが、主体となるのはこ

の地域でカビビ(cabibi)と呼ばれる二枚貝で、ラロ貝塚群を形成する貝種はこの貝 1 種が圧倒的に優勢である。

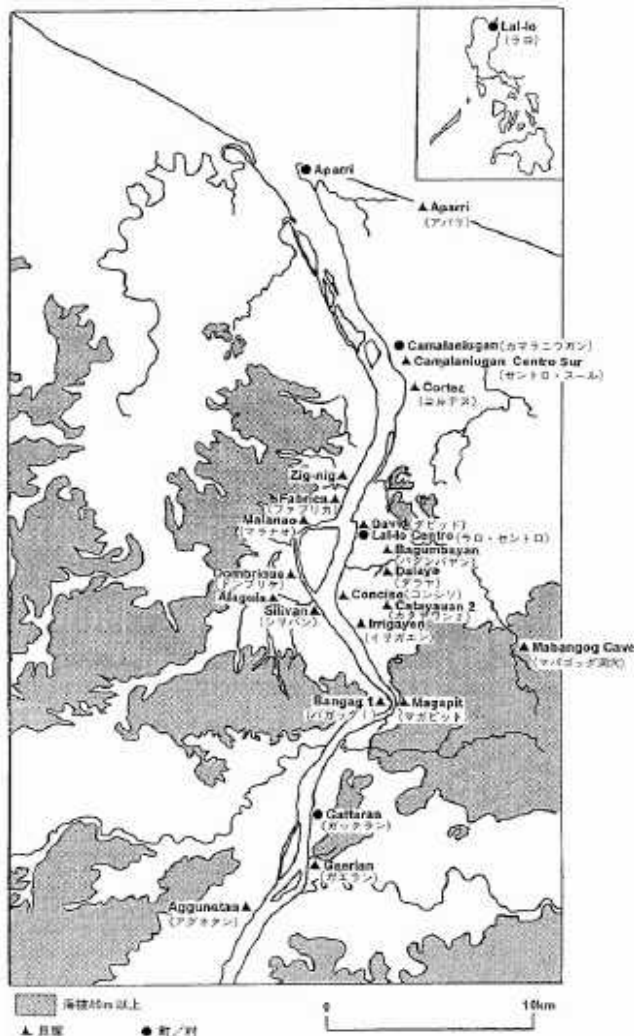


図1 ラロ貝塚群分布図

ラロ(Lal-lo)貝塚群の各遺跡から出土する土器群の編年的位置づけについては、無文赤色スリップ土器(3460-2970calBP 小川 2002b, c) 有文赤色スリップ土器(2925-2460calBP: 青柳他 1991、小川 2004b) 有文黒色土器群(2355-1530calBP: 小川 2003a; Ogawa, Ronquillo and Garong 2006) 無文黒色土器群(1515-955calBP: 小川 2004a)という序列が、層序と絶対年代によって確認されている(小川 2004b, 2006)。有文黒色土器群を出土する貝層からは鉄のスラッグが出土することから、2000年前以降、技術的には鉄器時代にあったと考えられる。これらの土器群が出現する以前の状況については、ラロ貝塚群南端の河岸段丘上に位置するガエラン遺跡の貝層中で剥片石器群から赤色スリップ土器群への移行が確認されている。剥片石器群を出土する貝層のうち、最上層の年代

が 4290-4090calBP、その直上の赤色スリップ土器を出土する貝層の年代は 4090-3685calBP であった。しかし赤色スリップ土器は数点しか出土していないため、器種構成等の内容は不明で、一時期の文化相を代表する土器群としては認定できない。そのため、カガヤン川下流域における土器の出現の問題、そしてその後の無文赤色スリップ土器群期とどのような関係にあるかは、依然、今後の課題である。いっぽう時代が下って、無文黒色土器群期以降の遺物については、貿易陶磁の出土が目を惹くが、それらに共伴する土器として、器面にスリップの塗布はないが、磨かれた褐色土器が確認されている。しかしこれも詳細は不明である。以上、ラロ貝塚群の遺物編年は、4つの土器群期に剥片石器群期と貿易陶磁器の時代を加えた6期に区分できる(図2)。

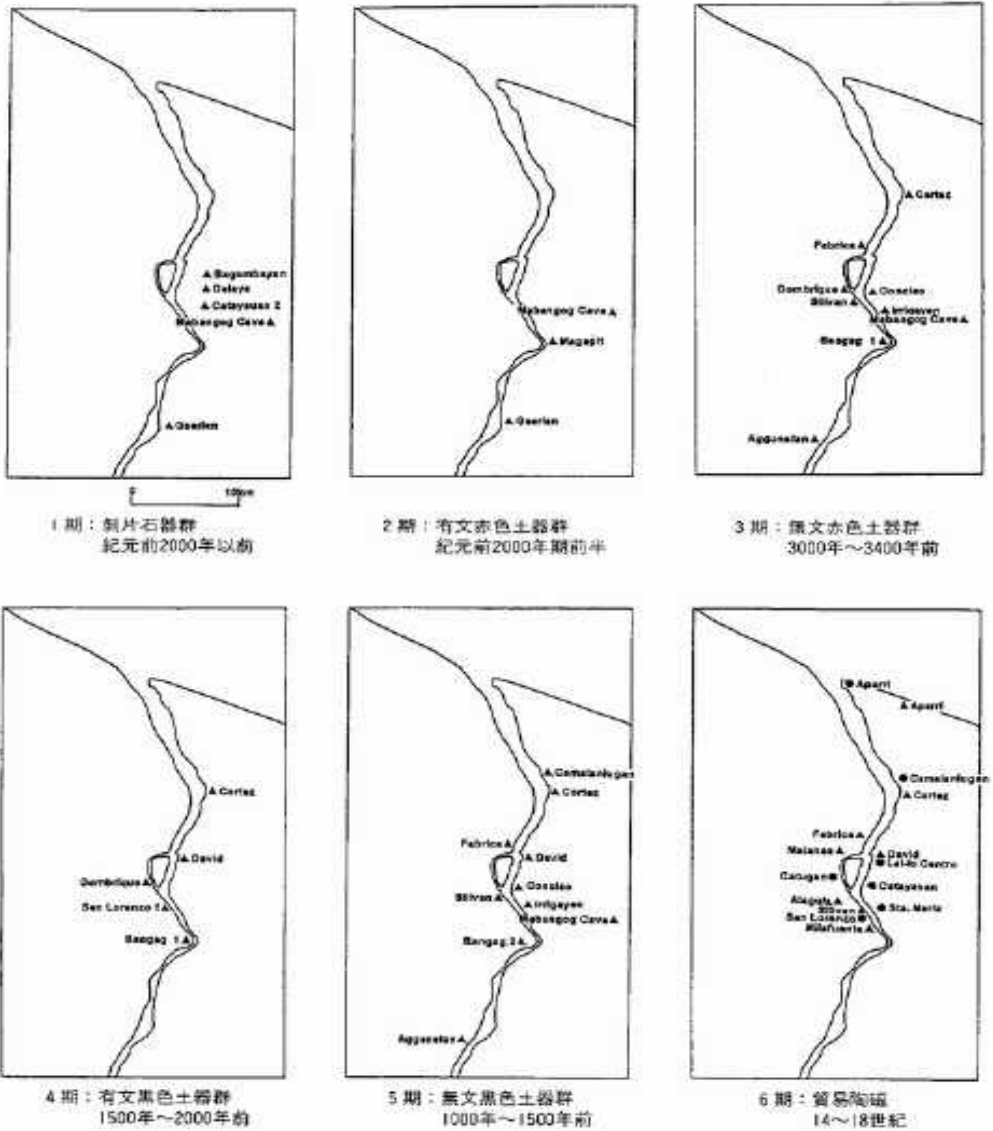


図2 ラロ貝塚群遺跡変遷図(貝塚 町・村)

これら4つの土器群には、その出土層位と各貝塚の立地条件とに特定の関係がみられる。最も古いと考えられる無文赤色スリップ土器群は、その後の時代にカガヤン川河岸段丘上に形成された貝塚の下に堆積するシルト層から出土する。この時期には貝の堆積はなく、貝採集以外の生業が営まれていたと考えられる。無文赤色スリップ土器群の時期に貝採集が行われなかった点については、当時の河川環境復元のため、現在、地質調査を実施中である。つぎの時期に属する有文赤色スリップ土器群は、カガヤン川に面した標高 50m の石灰岩台地上に立地するマガピット貝塚から出土した。この土器群は、マガピット貝塚以北の河岸段丘上では検出されていないが、近年の調査で、マガピット貝塚が立地する台地に連なる、石灰岩丘陵地域の開地遺跡(標高 100m)

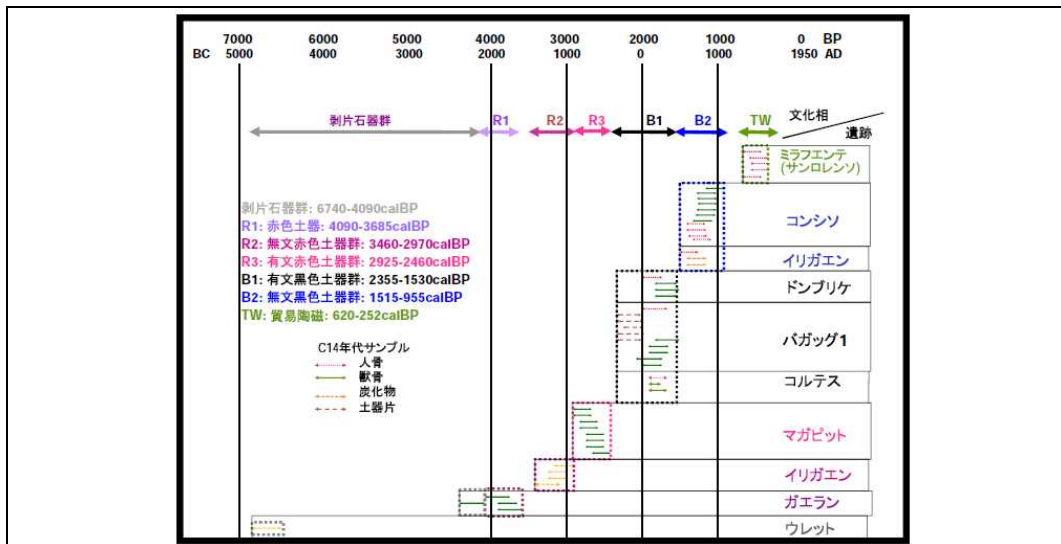


図3 ラロ貝塚群の遺物編年と出土遺跡の年代測定値

で出土している。その後続く有文黒色土器群と無文黒色土器群は、いずれも河岸段丘上貝塚の貝層中から検出されている。

2. 土器群の型式学的編年体系

ラロ貝塚群出土の4つの土器群は現在までに、無文赤色スリップ土器群(3460-2970calBP) 有文赤色スリップ土器群(2925-2460calBP) 有文黒色土器群(2355-1530calBP) 無文黒色土器群(1515-955calBP)という順序で出土することが、出土層位と絶対年代によって確認されている(図3)。以下では、4つの土器群の出土状況と型式学的特徴について比較・検討する。

2-1. 無文赤色スリップ土器群(図4)

ラロ貝塚群初出の土器群は無文赤色スリップ土器群である。この時期の遺跡は、標高 10m 以下のカガヤン川河岸段丘上に多くが分布し、河岸貝塚の下のシルト層からこの土器群が出土する。他の3時期の土器群は大量の貝とともに検出されるため、貝の集中的利用が考えられるが、この時期にはそれがない。当時の生業活動のあり方が他の時期とは異なっていたことは明白である。無文赤色スリップ土器群の最大の資料を提供するのはイリガエン遺跡である(小川 2002b, c)。地表面から 50cm ほど堆積する貝層(無文黒色土器群期)を取り除くと、その下のシルト層から無文赤色スリップ土器群が出土する。

無文赤色スリップ土器群は、その胎土や赤色スリップの色調、磨き調整などの点は、つぎの時期の有文赤色スリップ土器群に類似している。また、器種が Jar タイプと Bowl A タイプによって構成される点では類似しているが、有文赤色スリップ土器群にある Bowl B タイプはない。この土器群の口縁形態は、Jar タイプが5、Bowl タイプが3に分類できる(図4)。図4と5をもとに、無文と有文の赤色スリップ土器群を比較すると、両者間での口縁形態の違いは大きい。

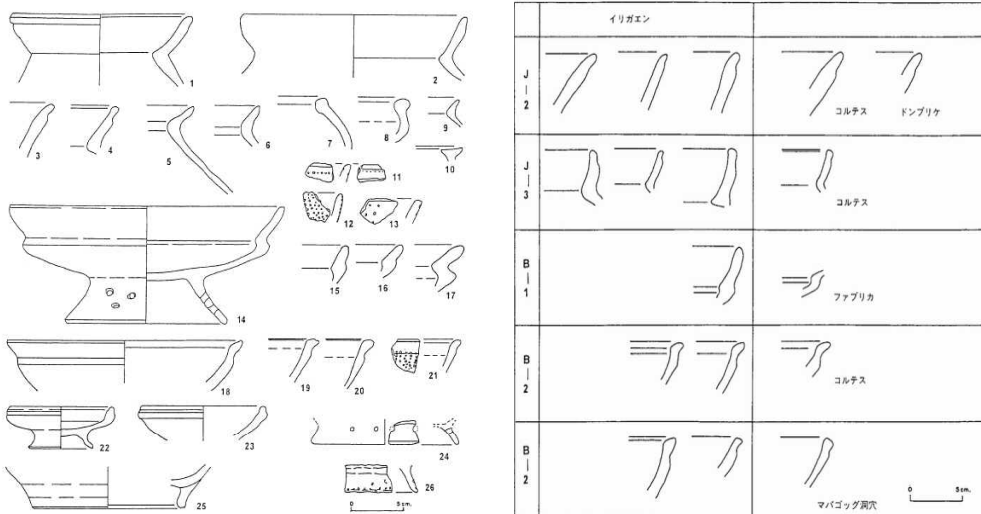


図4 . 無文赤色スリップ土器群(1-13: Jar Type, 14-26: Bowl Type, 右は遺跡間口縁形態比較図)

2-2. 有文赤色スリップ土器群(図5)

この土器群の標式遺跡はマガピット貝塚である。この貝塚はカガヤン川河口から約40km 地点、河岸に面した標高50mの石灰岩台地上に立地する。貝塚は台地の鞍部に貝、動物骨、土器片等が投げ込まれたかたちで形成され、貝層は深度5.5m、混貝率90%以上の純貝層であった。土器片は貝層上部から下部までくまなく出土したが、土器群の型式学的分析の結果、5.5mの貝層深度にもかかわらず、同一型式内に収まる(青柳他1988, 1991, 小川2004b, 2005a; 田中2005)。

この土器群の特徴は器面に赤色スリップが塗布され、研磨された、広口の口縁をもつJarタイプと、圈足をもつBowl Aタイプ、そして赤色スリップが塗布されていない、叩き目を外面に残す浅い鉢状のBowl Bタイプに分類できる。施文方法は串状工具による列点文、あるいは櫛歯状工具による連続刺突文を中心としている。施文部位はJarタイプでは胴部屈曲部に、Bowl Aタイプでは器部口縁部と圈足足縁部に集中する。Jarタイプは8つの口縁形態に分類できる。Bowl Aタイプでは施文が肥厚された口唇部に集中する。また圈足足縁内外面にも施文されている。文様構成は櫛歯状工具で連続山形に配したものが主である(図5)。またJarタイプには精緻な沈線と爪形文で構成された文様をもつ土器が少数みられる。これらは暗い色調の赤色スリップ、粗い胎土を特徴とし、この土器群に一般的な特徴とは一線を画すため、搬入土器と考えている。

有文赤色スリップ土器群を出土する他の遺跡はマガピット貝塚以東の丘陵地域に分布しており、河岸段丘上貝塚ではいまだ出土例がない。マガピット貝塚から南東10kmの丘陵地域には、貝はみられないが、有文赤色スリップ土器片が、焼畑耕作が行われている斜面地に散布する。斜面上の平坦地を発掘したところ、土器片に共伴して剥片石器が出土した(Garong 2006d)。包含層が30cmほどで石灰岩盤に達するため、これらの共伴を同時代とにわかに判断はしがたく、さらなる調査・研究を要するが、低地と山地との交流が時代を経て行われていた可能性を示唆する資料として興味深い。

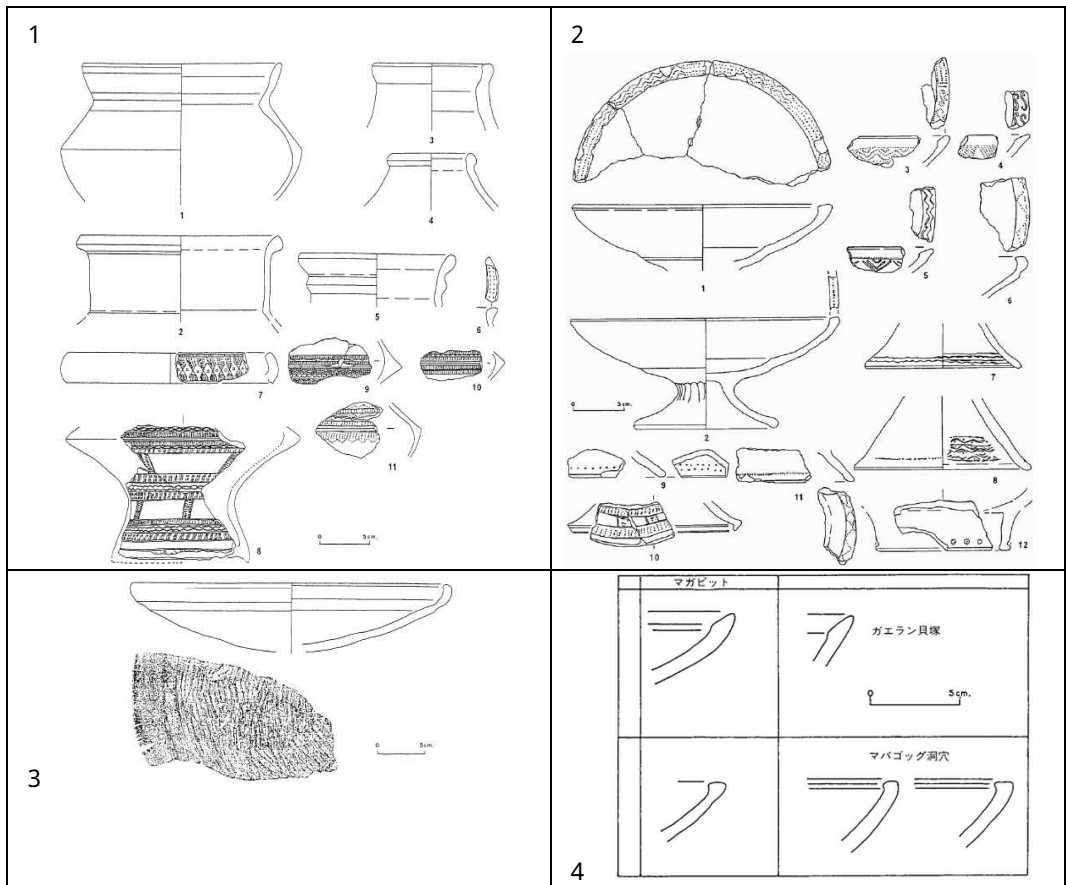


図5. 有文赤色スリップ土器群(1. Jar タイプ, 2. Bowl A タイプ, 3. Bowl B タイプ, 4.遺跡間口縁形態比較図)

2-3. 有文黒色土器群(図6)

この土器群期、さらに続く無文黒色土器群の時期を経て今日に至るまで、カガヤン川の河岸段丘上では、貝層が形成され続けることになる。貝塚の規模は 500m×50m、厚さ 2m へと巨大化する。貝層は混土率 10%以下の純貝層で形成されている。この時期以降、今日まで河岸での貝塚形成は継続され、遺跡の規模は拡大していく。また遺構については、甕棺墓(カトウガン貝塚ドンブリケ遺跡)が検出されている。土器以外の遺物としては、無文赤色スリップ土器群期からの有肩石斧が引き続き出土するが、同時に、貝層から鉄滓の出土がみられるのも有文黒色土器群の特徴である。

有文・無文ともに黒色土器の名称は器面の黒い色調に由来する。黒色土器の色調は、赤色スリップ塗布、磨き、焼成の土器製作過程を経たのち、熱いうちに土器を初殻で覆い、炭素を吸着させることによって、土器器面が黒色を呈するものである。黒い色調をもってこの土器群の特徴としたが、土器群のすべてが黒色を呈するわけではなく、炭素吸着が行われず、赤色スリップ塗布のまま焼きあげられ、使用、廃棄された土器もこの土器群のなかに含まれている。それは赤色の土器でも、この土器群がもつ形態的特徴を共有しているからである。いっぽう、同じく黒色を呈

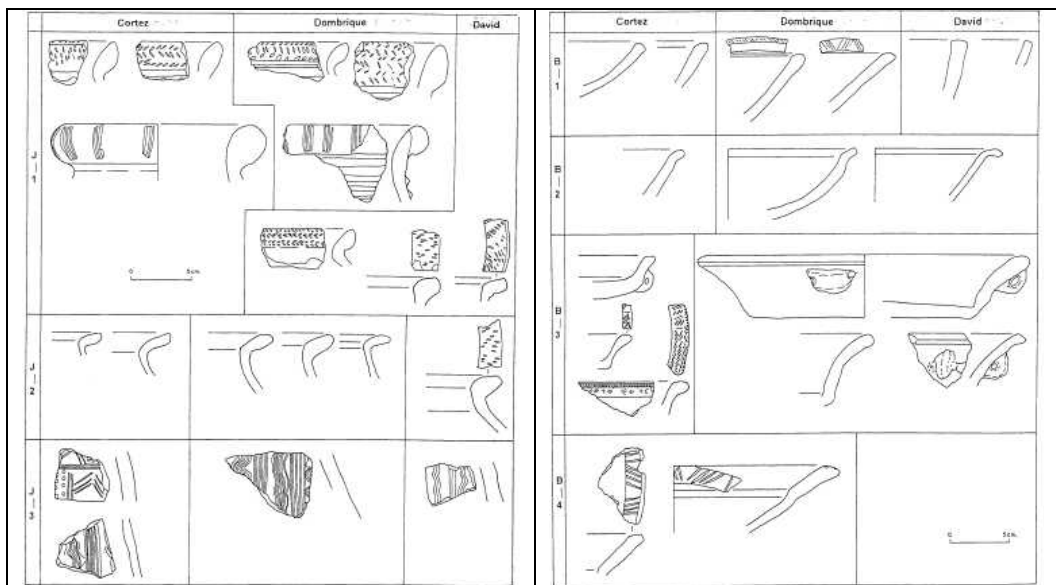


図6. 有文黒色土器群遺跡間口縁形態比較図(左: Jar タイプ、右: Bowl タイプ)

する無文黒色土器群と比較すると、同一器種の土器間でも、形態的に明白な違いがある。黒色の土器の色調が目を惹くことから「黒色土器群」と呼んでいるが、それは単に色の違いによって土器群を識別しているのではなく、型式学的な差異に基づいたものであることは言うまでもない。

有文黒色土器群の標式遺跡であるコルテス遺跡(ドゥゴ貝塚)では、無文赤色→有文黒色→無文黒色という、3つの土器群の相対的な編年序列を、ラロ貝塚群中ではじめて層位的に確認することができた。この土器群の器種には Jar と Bowl の2タイプがあり、形態的特徴によって Jar タイプが3つ、Bowl タイプが4つに細分できる。Bowl タイプは圈足をもつものと平底のものが存在する。平底の Bowl は、無文黒色土器群にはない器種で、有文黒色土器群の特徴のひとつとなっている。文様は Jar, Bowl いずれのタイプにみられるが、太い沈線を基調とした矢羽根状、連続山形文で構成されている(図6、小川 2003a; Ogawa, Ronquillo and Garong 2006)。

2-4. 無文黒色土器群(図7)

この時期も貝塚はひきつづきカガヤン川の河岸段丘上に形成され、両岸に広く分布する。その規模は有文黒色土器群期よりもさらに巨大化し、最大のもので2km×100m、貝層深度2mへと拡大する。無文黒色土器群を出土する貝塚は、現在、集落として人家が建ち並び、貝採集を生業とする人びとが生活する場として利用され続けている。貝層のほとんどを形成する1種の淡水産二枚貝は、現在では貝殻ごと市場へ売りに出されるため、貝塚に廃棄されることはないが、貝の採集はカガヤン川下流域の人びとの生活を長年、支え続けている。

無文黒色土器群期の遺構には、頭を東に向けた伸展葬墓がみられ、Jar や Bowl タイプの土器が副葬されている。またイリガエン遺跡では、直径50cmの炉址が検出されている。炉の覆土からは焼けた貝殻が検出されており、貝の剥き身加工や調理などに使用された可能性を示唆している

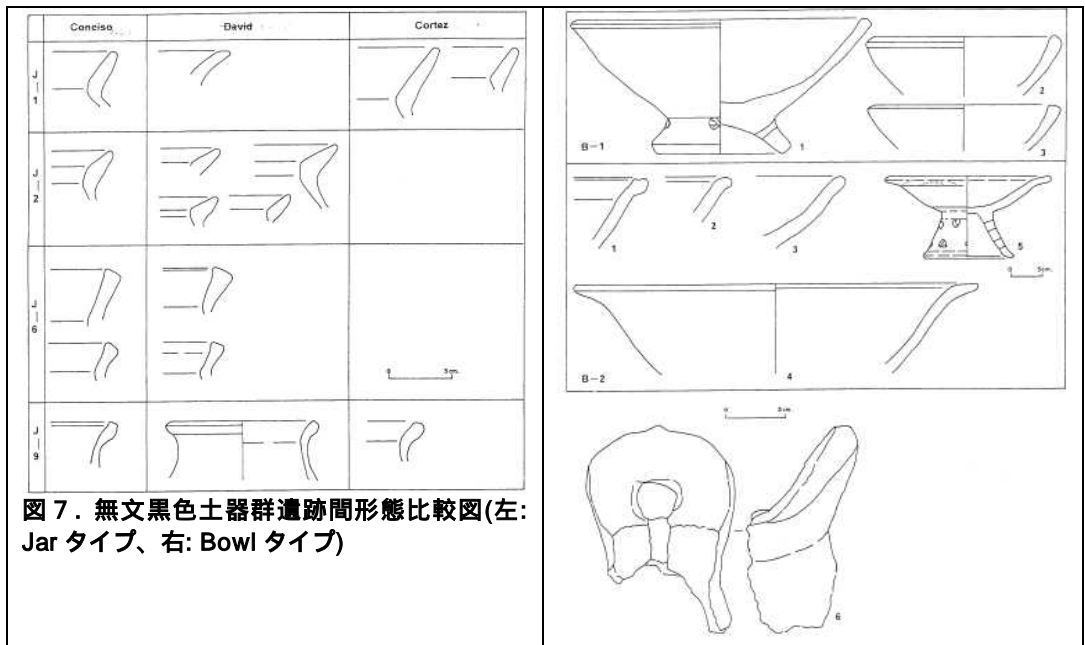


図 7. 無文黒色土器群遺跡間形態比較図(左: Jar タイプ、右: Bowl タイプ)

(De la Torre 2000)。

この土器群の標式遺跡はカタヤワン貝塚である。この土器群も Jar と Bowl の 2 つの器種で構成される(小川 2004a)。Jar タイプの口縁形態のバリエーションが増して 11 に細別できる。Bowl タイプは 2 つに分類され、いずれも圈足付きの鉢形土器であるが、器形・口縁形態ともに形態のバリエーションが、有文黒色土器群よりも小さくなっている。そのため Bowl タイプ土器の口縁形態は、有文黒色土器群 Bowl タイプ土器の口縁に文様がないものとの区別がつきにくくなっている(小川 2004b, 2005a)。

4. ラロ貝塚群における遺跡の時代的变化(図 2)

土器群の分析によって、ラロ貝塚群出土の 4 つの土器群文化相の特徴を抽出することができた。この 4 つの先史文化相に加え、ラロ貝塚群では土器を伴わない時期に属する剥片石器群、そして 1000 年前以降、現代にいたる貿易陶磁に伴う土器文化相も貝層の年代の決め手となっている。これら 2 期を加えて 6 つの時代の文化相それぞれに属する遺跡を、時代ごとに地図上にプロットすると図 2 のようになる。これら各時代の遺跡分布の変化は、遺跡群の時間的变化を示している。以下では、ラロ貝塚群の遺跡の時代的变化を追いながら、各期に特徴的な遺物と遺跡の営みを検討していく。

第 1 期：土器出現以前、剥片石器群を主体とする時期である(Ogawa 1999b)。これまでの調査で河岸段丘上貝塚から単体としての剥片石器は出土しているが、出土総点数は 10 点未満で、そのほとんどが製品としての出土であり、機能分化した石器群としてのまとまりを形成したかたちで出土してはいない。

剥片石器群を出土する貝塚は現在までのところ、カガヤン川東岸の丘陵地域に位置するマバゴッグ洞穴や開地遺跡群、そして河口から 40km 地点の東岸河岸段丘上に立地するガエラン遺跡のみである。いっぽう東岸から内陸へ 1～2km 地点の低地に位置するバグンバヤン、ダラヤ、カタヤワン 2 の 3 貝塚からは、剥片石器や石核がわずかに表採されているのみで、土器の出土はみられない。むしろ焼石の出土が顕著である。土器が採集されていないことから、これら内陸の 3 貝塚も土器出現以前の貝塚として第 1 期に属するものと考えられる。

剥片石器は、その形態から機能を類推することがむずかしい、いわゆる不定形剥片石器である。チャートと安山岩がその石材として顕著で、石器群としては、機能的にナイフとスクレーパーに分類される刃部をもつ剥片石器と、剥片製作の場を示唆するチップとハンマーストーン、そして調理の痕跡としての焼石などで構成されている。

ダラヤ貝塚のウレット遺跡では、4 m の貝層がオーガー調査によって確認されたが、オーガーで検出した炭化物から 6740-6500calBP の年代が得られている。いっぽうガエラン遺跡では前述したように、剥片石器群から土器への推移が層的に確認されている。地表面から 1 m 以上つづく貝層の 2 層最上層まで剥片石器が連続して出土したが、その直上の 1 層最下層からは赤色スリップ土器片が数点確認された。絶対年代では 2 層最上層が 4290-4090calBP、1 層最下層が 4090-3895calBP である。出土した赤色スリップ土器についてはこれまで、有文赤色スリップ土器群 Bowl タイプ土器の肥厚された口縁部内面に類似していたため、有文赤色スリップ土器群がラロ貝塚群で最初に出現した土器群と考えていた。しかしその後、マガピット貝塚の再発掘によって AMS14C 年代測定値を新たに得て、有文赤色スリップ土器群がより新しい時期に位置づけられることが明らかとなった。ガエラン遺跡出土の赤色スリップ土器片は、口縁形態が判別できるものがわずかに数点のみで、器種や形態のバリエーションが判明し、型式が確立した土器群として確認できるものではない。カガヤン川下流域における土器の出現の問題は、今後の課題として残されている。

ガエラン遺跡の年代から、剥片石器群の下限はほぼ 4000 年前ごろに設定できるが、石器群の構成内容や機能分析、そして遺跡の分布や機能については、今後、剥片石器群を出土する丘陵地域の洞穴・開地遺跡の実態解明が鍵となる。

第 2 期：無文赤色スリップ土器群の時期である(小川 2002b, c)。絶対年代では 3460-2970calBP の年代が得られている。この時期は貝塚が形成されず、土器群はカガヤン川下流域の河岸段丘上シルト層中より出土する。のちの時期の河岸段丘上の貝塚を発掘すると、貝層下のシルト層からはほとんどの場合、無文赤色スリップ土器群が出土する。しかし前の時期の剥片石器群期とのちの時期に挟まれたこの時期にだけ、なぜ貝を採集していないのかという疑問が生ずるが、現時点では、川の流れが緩やかなものへと変化し、カガヤン川下流域が貝の生息に適さない湿地帯の環境に変化した可能性が考えられる。この古環境変化については、古地形学、海進によるカガヤン川の水位への影響等の調査を実施中である。

土器とともに磨製石斧が共伴することは、これ以降の土器群も同じである。他に遺物、さらなる器種のバリエーションについては、今後の課題である。無文赤色スリップ土器群を出土する遺

跡は河岸段丘に広く分布しているが、その包含層に至るまでには、上に堆積する厚い貝層を調査しなくてはならない。標式遺跡であるイリガエン遺跡では、上層に堆積する貝層の厚さが 50cm と薄かったため、貝層下のシルト層を 3 年間にわたって広範に調査でき、土器群としての特徴を抽出することができた。この時期の生業基盤と古環境との関係もあわせ、今後の調査課題は多い。

第 3 期：有文赤色スリップ土器群の時期である(青柳他 1988, 1991, 小川 2004b, 2005a; 田中 1993, 1996, 2005)。絶対年代では 2925-2460calBP の年代が得られている。この土器群はマガピット貝塚を標式遺跡としている。この貝塚は河岸に面した標高 50m の丘陵上を中心として、その下の斜面地に分布している。丘陵上の鞍部に堆積した貝層の深度は 5.5m に達し、丘陵下では 2m の層厚をもつ。この深い貝層の上下いずれのレベルからも満遍なく有文赤色スリップ土器片が出土する。しかし河岸段丘貝塚のように、異なる時期の土器群が折り重なって堆積する様相はみせず、土器群間の前後関係を層位的に確認することができない。

いっぽうマガピット貝塚から東へ広がる石灰岩丘陵の開地遺跡でも有文赤色スリップ土器群の出土が確認されている。貝層はみられないが、剥片石器が共伴する。層厚が 30cm と薄いため、これら開地遺跡での有文赤色スリップ土器群と剥片石器群との共伴を、にわかに同時期とするにはとまどいがある。しかし有文赤色スリップ土器群の遺跡分布をみると、いまだ河岸段丘上では検出されておらず、むしろマガピット貝塚から東の丘陵地域に広がっている。丘陵地域の遺跡では、河岸から 5km の距離にあるマバゴッグ洞穴をのぞいて、貝層がなく、河岸のマガピットとは異なった生業基盤のもとで生活していたことが分かる。現在、狩猟採集民アフタが生活するこの地域の先史時代を想像する際に、低地と山地の交流を示す有文赤色スリップ土器群期の様相は多くの示唆を与えてくれる。今後の調査が最も期待される時期である。

第 4 期：有文黒色土器群の時期である(小川 2003a; Ogawa, Ronquillo and Garong 2006; 田中 1997a, 2004a, 2005)。絶対年代では 2355-1530calBP の年代が得られている。この時期も河岸段丘上に貝塚が形成される。コルテス、ダビッド遺跡などでは、有文黒色土器群の文化層の上に無文黒色土器群の文化層が堆積しているが、バガッグ 1 やドンブリケ遺跡では、有文黒色土器群のみの貝層堆積となっている。最近、無文黒色土器群期の貝塚とされてきたカタヤワン貝塚やサンロレンソ貝塚で、有文黒色土器群も出土することが確認されている。カタヤワン貝塚では河岸段丘端から 50m 内側で有文赤色スリップ土器片が検出されており、これは有文黒色土器群期にはじまった貝の廃棄が川に向かって進み、無文黒色土器群期にも貝層形成が水平方向に進行したことを示している。

この時期の貝塚はいずれも 200~500m 長へと巨大化し、この傾向はつぎの無文黒色土器群の時期にも引き継がれる。貝塚の大規模化、そして有文・無文の両黒色土器群期あわせて 1400 年間にわたる河岸段丘上居住は、カガヤン川下流域に生息する淡水産二枚貝を中心とする河川資源の集中的利用を加速させたことを示している。

貝の集中的利用と並行して、鉄生産がこの時期からラロ貝塚群ではじまっていた痕跡も検出されている。ドゥゴ貝塚イベ遺跡貝層から、鉄滓とともに焼土や焼けた器面を残す土器片が出土し

ている。その対岸の丘からは鉄鉱石が産出することも確認されている。貝採集とともに鉄生産は、当該社会の新たな展開と外的世界とのネットワークを広げる大きな原動力となったものと考えられる。

第5期：無文黒色土器群のこの時期は、前代に引き続き、河岸段丘上に巨大な貝塚を営む時期である(Ogawa 2004a)。絶対年代では 1515-955calBP にあたる。この時期の貝塚の規模はさらに巨大化し、カタヤワン貝塚の規模は 2km 長、100m 幅、2m 深度に及ぶ。貝塚の大半は河岸段丘上に立地し、前代からさらにいっそうの河川資源の利用が活発化した時期である。貝塚の分布は、現在でも貝採集や漁労が営まれる集落の範囲に一致している。今日では村落内に位置しないバガッグ2貝塚は、バガッグ1貝塚の背後、標高 50m の丘陵上に位置する。貝層は薄く、大規模な貝塚ではない。さらに南に位置するアグネタン貝塚は河岸段丘上に位置するが、ここでも貝層は 20cm ほどと薄い。貝層は薄いがこの遺跡にはシルト層中に造営された伸展葬墓群が広がっており、その副葬品として無文黒色土器群の完形品が出土する。この時期の伸展葬墓群は、カタヤワン貝塚やサンロレンソ貝塚でも検出されており、有文黒色土器群期にカトゥガン貝塚ドンブリケ遺跡から出土した甕棺墓とは埋葬様式を異にしている。

北部のカマラニウガン貝塚では現在でも貝採集が行われているが、20cm 厚の貝層が断続的にみられるのみで、ドゥゴ貝塚やカタヤワン貝塚のような 2m 以上の貝層堆積はみられない。カマラニウガン貝塚の立地するデルタに人間が居住を開始したのは 1500 年前からである。その頃のデルタはまだ現在のように 10km におよぶまでには発達しておらず、河口がすぐ近くに位置していた。海とデルタという新たな環境に進出した人間集団は、淡水、汽水、鹹水域にわたる、異なった環境下で幅広い資源を利用することが可能となった。そのため淡水産二枚貝の集中的利用がカマラニウガン貝塚では行われず、貝層堆積が薄い理由と考えられる。またこの貝塚がラロ貝塚群中、海に最も近い位置を占めている点は、異なる環境利用に有利であるという生業上の理由だけでなく、海へ開かれた場の機能からも考慮する必要がある。巨大貝塚を形成した貝の量は日常的消費を大きく上回るものであることを問題視し、余剰分を交換財として利用していた可能性を指摘した(小川 1997, 2005b, 2006)。

さらに前代に引き続いて貝塚からは鉄滓が検出され、鉄の生産と交易がいっそう活発に行われていたことが予測される。カマラニウガン貝塚の薄い貝層堆積の理由は、人口密度の低さや居住期間の短さに求めるのではなく、海を通じて他地域との交流を容易にした、貝や鉄の交易の場としての機能を想定することができる。

第6期：貝塚から陶磁器が出土する 14 世紀から 18 世紀にいたる時期である。いずれの貝塚も河岸段丘上に立地し、現在の集落が営まれている範囲とほぼ一致する。カガヤン川西岸のサンロレンソ貝塚シリバン遺跡ではチャンパ陶磁、ゴサイン窯の青磁皿、タイ製褐釉壺片などが出土している。またアラギア貝塚からは、元代の褐釉壺が表採されている。その他のほとんどの遺跡から明、清代の陶磁器片が採集されている。サンロレンソ貝塚の南のはずれに位置するミラフエンテ遺跡の伸展葬墓からは、人骨に共伴して明代青磁片と鉄製刀子が出土している。この時期の貝層

の厚さは、現在に到るまでの居住による貝層自然堆積の攪乱によって明確にはなっていない。しかしラコ貝塚群全体の発掘結果を総合すると、第5期の貝層よりも薄い傾向にある。その理由には、貝採集量や人口密度に大きく左右されるものと考えられるが、同時に現在のように、採集された貝が貝殻ごと交易のために採集地からもち出されていたとすれば、貝塚への貝殻の供給量は少なく、貝層も薄くなる。上で予測したように、有文黒色土器群期から貝・鉄の交易が行われていたとしたら、貝を剥き身にし、乾燥するなどの加工を経て交易財とした段階から、貝殻ごと生で貝を商品として集落外にもち出した時期への変化が想定される。その時期については現在のところ明確ではないが、この第6期に起こっている可能性が高い。

カガヤン川河口の町アパリは清代になってはじめて中国文献に登場する。そしてアパリの街中にはしばしば清代陶磁片が散布している。またアパリの海辺の砂丘に形成されたアパリ貝塚は海産貝で形成されているが、スリップがけのない土器片とともに、17、18世紀の清代陶磁を産する。アパリ貝塚はアパリの街から東へ延びる海岸線に面した砂丘に位置する。5m以上の高さをもつ砂丘の基部に貝層が形成されているにもかかわらず、その年代はわずかに数百年前である。河口の遺跡の年代が新しいのは、河口デルタが現在のような形になったのがこの数百年のことで、それ以前は現在ほどには発達していなかったことを裏付けている。中国文献でアパリに比定されている「大港」が文献に出てくるのが17世紀以降であることも、これを裏付けている。

5. おわりに

ラコ貝塚群6期にわたる時代区分をとおして、遺跡立地の変化を読み取ることが可能である。1期の剥片石器群と3期の有文赤色スリップ土器群期の遺跡は、貝層が形成されるが、それは後の黒色土器群期とは異なり、河岸や河口から遠い地点に立地する。その理由として、カガヤン川の古環境の変化、それに左右される貝の生息域が、その後の時代とは異なっていた可能性が考えられる。2期の無文赤色スリップ土器群期には遺跡はほとんどが河岸段丘に下りてくるが、貝は利用されていない。広い範囲に遺跡が分布し、遺跡数も増加している。その分布はつぎの4期の貝塚分布とほとんど重なっている。しかし無文赤色スリップ土器群期には貝塚は形成されない。他の時期とは異なり、この時期だけなげ貝の採集が行われていなかったのか、その理由を自然条件に探るのが今後の課題である。また3期の有文赤色スリップ土器群期には、丘陵地域に遺跡が広がっている。内陸に10km入ると、貝の利用から切り離された遺跡は分布する。

このあとの4期の有文黒色土器群期にも、河岸段丘上に貝塚が分布する。この時期の貝塚から鉄生産の開始を示唆する遺物が出土しており、5期までそれは続く。鉄鉱石を産する場所がこの地域には存在し、豊富な貝資源以外にもこの時期から鉄生産とその交易が開始された可能性が高い。5期になると河岸貝塚のほとんどから無文黒色土器群が出土する。貝塚の巨大化、鉄生産の継続などから、外的世界とのネットワークの拡大を予測できる。6期の貿易陶磁の時代になると、遺跡と現在の集落とが重なり合う。スペイン支配と相前後し、貝、鉄生産、その他の地域内産物を背景として、この時期にラコ貝塚群は広くアジア世界との関係を広げ、現在に到る。

以上の結果から、新たに多くの疑問も提示された。それらに答えるため、環境利用や生業実態の復元、そして丘陵地域のさらなる調査が、今後の課題である。

文献目録

青柳洋治

- 1977 「研究史・ルソン及びその周辺諸島の考古学」, 黒潮文化の会編『日本民族と黒潮文化-黒潮の古代史序説-』角川選書 91: 187-199
- 1983 General Survey in Northern Luzon. In K. Shirakihara (ed.) *Batan Island and Northern Luzon*: 69-87, 116-119, 157-161. Kumamoto University.
- 1999a 「南海の陶磁貿易」, 『季刊 考古学』66: 55-59
- 1999b 「陶磁貿易史からみた東南アジア」, 『新版 入門東南アジア研究』: 75-87.
- 2001 「黒潮文化」, 『海のアジア』6、岩波書店

青柳洋治・田中和彦

- 1985 「カガヤン川流域の貝塚土器をめぐる二、三の問題」, 『上智アジア学』3: 81-129

青柳洋治・M. L. Aguilera, Jr.・小川英文・田中和彦

- 1988 「ラロ貝塚群の発掘」, 『上智アジア学』6: 63-104
- 1989 「ラロ貝塚群の発掘(2)」, 『上智アジア学』7: 101-131
- 1991 「ラロ貝塚群の発掘(3)」, 『上智アジア学』9: 49-137
- 1993 Excavation of Hill Top Site, Magapit Shell Midden in Lal-lo Shell Middens, Northern Luzon, Philippines. *Man and Culture in Oceania* 9: 127-155

青柳洋治・小川英文・田中和彦

- 1996 「フィリピン北部、マガピット貝塚出土の装身具」, 国分直一先生米寿記念論文集、劉茂源編『ヒト・モノ・コトバの人類学』: 372-383、慶友社

Aoyagi, Y., H. Ogawa and K. Tanaka

- 1998 Excavation, and Ornaments Discovered at the Magapit Shell-midden Site, in Northern Luzon. 『上智アジア学』15: 167-180

Bautista, A.

- 1996a Animal/Human Remains from Bangag I, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.
- 1996b Animal Remains from Dombrique Site, Catugan, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.
- 1996c Field Report on Lal-lo Archaeology Project, August-September 1996. Typescript, National Museum, Manila.
- 1997 Zooarchaeological materials from Bangag Archaeological Site. Typescript, National Museum, Manila.

Cabanilla, I.

- 1972 Neolithic Shellmound of Cagayan: The Lal-lo Excavation. Field Report #1, Archaeology Division, National Museum, Manila.

De la Torre, A.

- 1995 Brief Report: The Lal-lo, Cagayan Archaeological Project 1995. Type script, National Museum, Manila.
- 1996 Brief Report: Cagayan Valley Archaeological Project, Santa Maria, Lal-lo, Cagayan from February 7 to March 3, 1996. Typescript, National Museum, Manila.
- 1997 Rapid Cave Assessment Report of Mabangog Cave located at San Mariano, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.
- 2000 Preliminary Report of the Lal-lo, Cagayan, Archaeology Project: Clemente Irigayen Property Site (II-1995-O), Santa Maria, Lal-lo, Cagayan. 『東南アジア考古学』20: 67-110
- 2002a Lal-lo, Cagayan Archaeological Project 2000: Archaeological Exploration of Sites, 小川英文編『カガヤン河下流域の考古学調査』: 69-78、平成 11 ~ 13 年度科学研究費補助金(基盤 A(2))研究成果報告書
- 2002b Cagayan Valley Archaeology Project 2001: Area A, San Lorenzo III Site (Siliban), San

- Lorenzo, Lal-lo, Cagayan. Typescript, Manila: National Museum.
- Garong, A. M.
- 1996a A Report on the Archaeological Excavation in Fausto Sison Sr., Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Typescript. National Museum, Manila.
- 1996b Progress Report on the 1996 Archaeological Excavation of the Conciso Property Shell Midden Site in Brangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Typescript. National Museum, Manila.
- 2001 Culture in Trash. An Archaeological Excavation of Conciso Property Shell Midden Site, Catayauan, Lal-lo, Cagayan Valley, Northern Philippines, 『東南アジア考古学』 21: 120-145
- 2002 Archaeological Exploration and Excavation in Cagayan Valley, Northern Philippines. 小川英文編 『カガヤン河下流域の考古学調査』: 33-68、平成 11～13 年度科学研究費補助金(基盤 A(2))研究成果報告書
- 2006a Status Report on the Archaeological Excavation of Leon Ibe Property, Camalaniugan, Cagayan. 小川英文・ロンキリオ編 『北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査』: 130-137、平成 15～17 年度科学研究費補助金(基盤 A(1))研究成果報告書
- 2006b Status Report of the Cagayan Valley Archaeological Project 2003-2004: Archaeological Survey and Test Excavations on Cave Sites. 小川英文・ロンキリオ編 『北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査』: 91-104
- 2006c Status Report of the Rogelio Gaerlan Property Shell Midden Site - Archaeological Excavation in Dummon, Gattaran, Cagayan Valley. 小川英文・ロンキリオ編 『北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査』: 120-129
- 2006d Archaeological Undertakings in the Municipalities of Lal-lo and Gattaran, Cagayan Valley, Northern Philippines: 2004-2005. 小川英文・ロンキリオ編 『北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査』: 76-90
- 2006e Reference Collection of Fish Collected from Cagayan River. 小川英文・ロンキリオ編 『北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査』: 105-118
- Garong, A. M. and T. Toizumi
- 2000 Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan. 小川英文編 『ラロ貝塚群の発掘』: 50-78、平成 7～9 年度科学研究費補助金(国際学術調査)研究成果報告書
- 三原正三・奥野充・小川英文・田中和彦・中村俊夫・小池裕子
- 2001 「フィリピン・カガヤン河貝塚群出土遺物の AMS¹⁴C 年代」 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』 12: 205-213、名古屋大学年代測定総合研究センター
- 2002a AMS 14C age of Cagayan shell-midden Sites, Northern Luzon, Philippines. 小川英文編 『ラロ貝塚群の発掘調査』: 117-124、平成 11～13 年度科学研究費補助金(基盤 A(2))研究成果報告書
- 2002b 「フィリピン、ラロ貝塚群出土遺物の AMS14C 年代と出土人骨の食性分析」、 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』 13: 82-104
- 三原正三・宮本一夫・小川英文・中村俊夫・小池裕子
- 2003 「黒色土器・繊維土器の前処理法と炭素含有量について」、 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』 14: 33-37.
- 三原正三・小川英文・黒坂禎二・中村俊夫・小池裕子
- 2004 「土器内部の炭素を用いた AMS14C 年代測定」、 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』 15: 235-240
- Mihara, S., Miyamoto, K., Ogawa H., Kurosaka, T., Nakamura, T. and Koike, H.
- 2005 AMS 14C dating using black pottery and fiber pottery. Radiocarbon 46-1: 407-412.
- 三原正三・小川英文・田中和彦・中村俊夫・小池裕子
- 2005 「フィリピン、ラロ貝塚群における剥片石器～無文黒色土器群期の AMS¹⁴C 年代」、

- 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』16: 169-180
- 小川英文
- 1996 「狩猟採集民ネグリの考古学 - 共生関係が提起する諸問題」、スチュアート ヘンリ編 『採集狩猟民の現在』: 183-222、言叢社
- 1997 「貝塚洪水伝説 - フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」、『東南アジア考古学』17: 119-166
- 1998 Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines - Archaeological Study on the Prehistoric Interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest. 『東南アジア考古学』18: 123-166
- 1999a 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」、『民族学研究』63-2: 192-202
- 1999b Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学』19: 93-114
- 2000a (編著) 『ラロ貝塚群の発掘』、平成7~9年度科学研究費補助金(国際学術調査)研究成果報告書
- 2000b 「狩猟採集社会と農耕社会の交流 - 相互関係の視角」、小川英文編 『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店
- 2002a (編著) 『カガヤン河下流域の考古学調査 - 狩猟採集民と農耕民の相互依存関係の歴史過程の解明』、平成11~13年度科学研究費補助金(基盤A(2))研究成果報告書
- 2002b Chronological Study on the Red-Slipped Pottery of Lal-lo Shell Middens - Special reference to the non-decorated red-slipped pottery under the shell middens. 『東南アジア考古学』22: 59-80
- 2002c 「ラロ貝塚群赤色土器の様相 - 無文赤色土器の位置づけをめぐる」、『外大東南アジア学』7: 73-96
- 2003a 「ラロ貝塚群出土有文黒色土器群の型式学的編年研究」、『東南アジア考古学』23: 23-57
- 2003b 「野性の残像 - 過去をめぐるイデオロギーの磁場」、スチュアート ヘンリ編 『野生』の誕生 - 未開イメージの歴史』: 71-102、世界思想社
- 2004a Chronological Context of Non-Decorated Black Pottery Phase from Lal-lo Shell Middens - Analyses of the Black Pottery from Conciso Site, Catayuan Shell Midden, in the Lal-lo Shell Middens, Northern Luzon, Philippines. In V. Paz (ed.) Festschrift for Dr. Wilhelm G. Solheim II.: 184-208. Quezon City: The University of the Philippines Press.
- 2004b 「ラロ貝塚群出土土器群の型式学的編年研究」、『長野県考古学雑誌』105: 1-33
- 2005a Typological Chronology of Pottery Assemblages from the Lal-lo Shell Middens in Northern Luzon, Philippines. 『東南アジア考古学』25: 1-31.
- 2005b 「森と川の民の交流考古学 - 先史狩猟採集社会と農耕社会との相互関係史」、池谷和信編 『熱帯林に暮らす人々』: 35-63、人文書院
- 2006 「大貝塚を作った人々: ルソン島ラロ貝塚群」、印東道子編 『環境と資源利用の人類学 - 西太平洋の島々における資源利用』: 173-196、明石書店
- Ogawa, H. and M. Aguilera, Jr.
- 1992 Data Report on the Archaeological Explorations in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. Journal of the Institute of Religion and Culture 10: 41-113, Tokyo: Kokushikan University
- 小川英文・W. ロンキリオ(編)
- 2006 『北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査—先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の解明—』、平成15年度~17年度科学研究費補助金(基盤A(1)海外学術調査)研究成果報告書
- Ogawa, H., W. Ronquillo and A. Garong
- 2006 Typological and Chronological Studies on the Decorated Black Pottery Assemblage from Lal-lo Shell Middens. 『東南アジア考古学』26: 1-33.
- 田中和彦

- 1993 「フィリピン完新世・先鉄器文化編年研究序説」、『東南アジア考古学』13: 173-209
- 1996 「ルソン島北部における方角石斧に伴う土器の検討 - 沈線による連続菱形文土器の検討」、『東南アジア考古学』16: 149-160
- 1997a 「カトゥガン(Catugan)貝塚の発掘調査」、『東南アジア考古学』17: 210-225
- 1997b The Kite Photography of Bangag I Shell-midden Site, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学』17: 197-209
- 1998a 「サンロレンソ III 貝塚(シリバン遺跡)の発掘調査とその問題」、『東南アジア考古学』18: 263-287
- 1998b 「ルソン島北部、ラロ貝塚群、バガッグ I 貝塚の発掘調査と若干の問題」、『上智アジア学』16: 171-211
- 1999 「フィリピン、ラロ貝塚 - 巨大貝塚の発掘と成果」、『季刊考古学』66: 75-78
- 2000 「長距離交易とフィリピン低地社会の社会統合過程」、小川英文編 『交流の考古学』: 95-133、朝倉書店
- 2002a 「フィリピン、ルソン島北部の土器」、第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編 『東南アジア考古学最前線』: 34-45、クバプロ
- 2002b Ceramic Chronology in Northern Luzon: Typological Analysis of the Pottery from the Lal-lo Shell-middens. Ph. D. Dissertation. University of the Philippines, Quezon City.
- 2002c 「フィリピン、ルソン島北部カガヤン川下流域の古環境と環境利用の変遷 - 調査の現状と課題」、『環境情報研究』10: 93-126.
- 2003 The Excavated Pottery of the San Lorenzo III Shell-midden, Lal-lo, Northern Luzon, Philippines. 『東南アジア考古学』23: 93-111.
- 2004a 「ルソン島北部、鉄器時代貝塚の発掘調査—ラロ貝塚群、バガッグ I 貝塚の発掘調査」、『考古学ジャーナル』519: 29-32
- 2004b The continuity and the discontinuity of the occupation of the shell-midden sites in the lower reaches of the Cagayan River, northern Luzon - with the relation to the floods of the Cagayan River-. In V. Paz (ed.) Festschrift for Wilhelm G. Solheim II: 158-183. Quezon City: The University of the Philippines Press.
- 2005 「「赤の時代」から「黒の時代」へ - ルソン島北部、カガヤン川下流域、ラロ貝塚群における後期新石器時代から鉄器時代の土器編年」、『上智アジア学』23: 313-401
- 樋泉岳二
- 1999 「Batissa childreni の季節的成長パターンと死亡季節査定の可能性(予察)」『東南アジア考古学』19: 57-69.